



木曾と小鳥
樹の栽培法
切抜帖
要さむが爲に、
別子通信
安筑蘇門會便り
コーラス
清い心の特主
報 - 告

(日四十月六年四十四治明)
可認物標郵種三第

(日五廿月每定)
行發期

号 十 四 百 第

日五廿月三年一十正大

木曾と小鳥(續き) 菊池生

木曾地に見らる、イスカ(和名シロバライスカ)は雀科に屬する鳥でヨーロッパ及びアジアの北方區域に産するもので秋になると南の方へと渡り来る。嘴は右左に交叉せるものと左右と反對のものがある、時々代へると云ふがどうかあやしい。十二三年前に非常な群をなして木曾に現はれた事があつたさうな。

此地方の人々の話に依ると當歳が紅くて次第に變色するとも云ふが確かな事がわからぬ故黒田氏に問へ合はせた所所次の様な返事がきた「イスカの雄の成鳥は一般に赤み多し偶には老鳥にて全く黄色のものもあり、雌は青きを普通とす、而し雌の老鳥には雄の黄色と同程度のものもあり尙稀には一部分赤羽を混じたるものさへあり、一般に云へば雄は赤、雌は青きものなり稀には雄に青、雌に赤ブチが出来る事もあれど雄程には赤くならぬ。

イスカの幼鳥は色、雄に似て鈍き色にて腹背部とも暗褐色の縦斑あり赤色のものは決してなし云々」イスカは聲低けれど節面白く囀り松環等與へると其交叉せる嘴にて之を破り食ふ様可笑し飼養して其實際を認めつ、あり。

次に候鳥なるウツに關しては木曾福島地方の人々の言では、黒色のクロウツと頬の赤色な、アカウツとは種類も鳴き聲も違ふ

やうな事を言ふてる。アカウツにも赤い程度が色々ある。猶腹も頬も同じく赤いベニバラウツとの關係はどうあらうか、黒田氏に依れば

「黒色のものは雌で赤色の方は雄である然してウツに二様の色彩の相違のある事は云ふまでもない事實である、この色の相違に關して左の三説がある

(一)ウツの下面灰色と紅色とあれども同種二色にして一は單に灰色のもの紅色型といふの外なし

(二)下面灰色のウツは老鳥にして紅色なるは幼鳥なり

(三)幼鳥は胸腹部灰色にして老鳥になるに従ひ紅色の度を増すならんも飼養越年せは紅色部は灰色に變ず即ち飼養其他に原因するならん

以上三説の内にて余亦第三説者と同様紅色のものを飼養して居た處次第に灰色に變じて來て最早紅色を現はさぬ様になつた經驗を有するスタインゲル氏によれば此赤色を帯びる傾向は歐州産の種類に於けるよりも日本産の場合の方が著しく日光山及び越中立山にて獲れた二個の雄鳥は極端な例であつて腰の白色中に迄も美しい淡紅色を帯びて居ると記述せられた扱て上記の第一及び第三説中何れが正しいかは多くの紅色及び灰色のものを別々に長年月飼養して見ること、幼鳥の羽色の變化を實驗すること、で大體の見當丈け付くであらうが其他野外

友 林 蘇 岐

に於ける食物の調査も必要であらうが然し今の處では左の結論に達するのである

- (一)下面の灰紅兩色は雄成鳥の同種二色の現象による場合
(二)下面に紅色あるは雄成鳥にて長く飼養せば漸次灰色に變化する場合
(三)幼鳥も下面灰紅兩色ありや否やは不明
(四)下面灰色のものに老鳥ある事は確實なるも紅色のものは幼鳥に限らる

尙想像を逞ふすればウソの下面灰紅兩色あるのは完全な同種二色でなく其一種の現象であつて灰色型か基型で紅色型は其變型であるで見られる然し此紅色型は固定性が稍少ない爲めに何か外界の相違又は生活状態に變化あるときは此型を維持する事が出来ず變化を來すものと考へられるであらう夫故紅色にも種々程度があつて或者は眞に紅色が多いのに或者は灰色型との差が至つて少ない程度のものさへある事が屢々觀察せらるるのである、此研究は一寸面白い事であるから地方の諸君の調査せられん事を望みます、因に雌にも上下兩面の色の濃淡ある事を茲に報告して置く

白斑は北方の他種類よりも日本産のものにあつて普通ではないが見られる例令は東京越中、立山、九州の標本で二雄二雌のものに此現象ある事を記述せられて居る、余も亦日光雄、北海道、伊豆、大和の三雄に此白斑あるものを所蔵する云々
以上は鳥の雜誌中に詳細の記事がありま

大正十年十月以降、捕鳥日記(細澤氏)

Table with columns for dates (e.g., 十五日, 十六日, 十七日, 十八日) and bird counts for categories like ツグミ, ミヤマ, アトリ, 其他, 計.

出して言ふ實際家でどつちもいらしいには違いないが
而して木曾ならば目のあたりに材料が澤山あるからして幾多の問題は割合に容易に解決されさうに思はれる。兎に角木曾谷の諸君には特別な御援助を願はねばならぬ開田村西野、細澤氏の調査に依れば次の如し
「秋の小鳥は普通當地に於ては北東よりきて南西へ行くものが多い然るに本年(大正十年)は西より来る鳥最多く小生のトヤは乗鞍岳の西南にあるので鳥は乗鞍の麓より来るらしく思はる、のが多數である然してアトリ、シヤマは狩獵期即ち十月十五日頃より始まり月末が盛りで(鶴)ツグミは十月廿六日頃より獲れて十一月三四日より十日間位が全盛である。思ふに昨年は木の實がよくなつた爲小鳥の來る事も例年よりは多く残念な事は鶴の最も盛りの十一月九日の兩日に大雪であつた事で此兩日には少なくとも六百位は捕れたものを云々

友 林 蘇 岐

Table with columns for dates from 十一月一日 to 十一月十六日 and numerical data for bird counts across multiple rows.

午後より雨
雨天
風強し
昨日より鶴の群見ゆ
風あり
曇にて天候申分なし
積雪五寸網氷りて張る
夕方捕る同上
愈々鳥の盛りとなる
雪降りて七時半頃より三棚を上ぐ
大雪にて網張れず残念なり
一日中鳥ありき廻る風なく最もよき天候なり
大雪にてツグミ實に澤山居る残念なり
本年中にて最も盛りならん
大風

Summary table with columns for dates (十七日, 十八日, 十九日, 二十日, 二十一日) and bird counts for categories like ツグミ, ミヤマ, アトリ, 計.

未だ捕鳥の見込ありしも餘りの大雪にて中止し下山す、大正九年の鶴の盛りは十一月五日、大正八年にては七日であつた。
日記中其他とあるは、イヌカ、イカロ、シメ、ヒワ等である木曾の谷も廣いから獵期の盛りも東西南北で多少の違ひはあると思ふ。細澤氏の日記ではミヤマとツグミと同記して居る故詳細は不明だが原金左工門氏及び入谷氏の日記に依るときはミヤマが先づ現はれ少し遅れてツグミが捕れることがわかる。

Table with columns for dates from 十五日 to 廿四日 and bird counts for categories like ツグミ, ミヤマ, アトリ, 計.

又ツグミの全盛期は原氏にては十一月の七日頃より十三日

日頃まで、入谷氏では十一月の七日頃より十三日頃まで大体一致してゐる。ウグミの類は春にはまた歸へるものだから一月以降の獵の詳しい事を知りたいと思ふけれど澤山捕れない爲め網を中止して歸宅して仕舞ふのは遺憾である

原 氏	入谷氏
十一月七日	一五八
八日	二九〇
九日	九四
十日	八五
十一日	二二〇
十二日	四三五
十三日	一七〇
十四日	八六
	一八六
	五七
	八一
	一〇二
	九三
	七八
	七三

(未完)

桐樹の栽培法

西澤生

其一、郷土及適地
桐樹は玄參科の落葉喬木にして暖温の兩帶に亘りて生育す。適地は砂質壤土の深地に於て緩なる傾斜を有する適潤地を可とす。故に濕氣の過度なる土地及び粘力の強き土地又は乾燥地、至淺地等には適せざるものなり、因て不適當なる土地には相當の人工を加ふるを要す、即ち濕地に排水を施し、粘り強き地には砂石灰等を混じ、乾燥瘠惡地には堆積肥料を施し又至淺地には二尺以上の深さに耕耘する等種々の手入れを必要なり。

りどす、而して本樹は西日の強く受くる土地には生育良好ならざるものなり。

其二、分根苗仕立法

本樹は分根法に依るを最良とす、此方法は母樹の若根或は一年生苗木を秋季落葉後と春季新芽の生ずる以前に掘取るものとあり。即ち秋季のものに對しては掘根を四五日間蔭乾とし、之れを一貫匁位の束となし苗圃に一尺位の深さに溝を掘り、之に根苗を横に並べ、其上に四五寸位土を被ひて埋め置くべし、若し雨水の溜滞の恐あるときは軒下の乾土中に埋め置く可とす。翌春土用頃に至ればその根苗を掘出し長さ五六寸に切り苗圃に移植するにあり。又春季に掘取りたる根苗も矢張四五日間蔭乾としたる後五六寸の長さに切り苗圃に移植するにあり。

先づ移植地は日光の直射せざる適潤地を選び深く耕して深さ五寸位に筋堀となし、その筋中に木灰又は燒土等を少量散布し、之に根苗を上土と均一に斜形に並べ土を半ば寄せかけ一度鍬の裏にて能く押へ其上に殆んど全部に土を被ふなり、此根苗の移植終れば全面に藁又は雜草其他の物を布き地上に日光の直射するを防止且雜草の發生を防ぎて苗木の生育を速ならしむべし。

其三、苗木の手入及除草施肥法

根苗移植後は約五十日間にして數芽を發生す、その時は最良の萌芽を壹本存立し、他は竹にて長さ二尺位に造りたる篋を以て

其四、掘取及撰別法

春季分根移植したるものを其秋季落葉後に至り掘取りて、苗木の根部を五六寸存置し余分の根は切斷して翌春の移植苗に供すべし、而して撰別せし苗木は十木づ、一束となし、苗圃に根部を深く埋めて假植し冬季中は苞の柄を以て梢頭を覆ひ霜害を防ぎ翌春まで可憐に圍ひ置くべし。若し苗木中劣等のものあるときは尙一回苗圃に移植して發育善良ならしむべし。

其五、造林地栽植法

本樹栽植の季節は春の彼岸前後を最良とす、而して苗木植付の距離は畦間十尺、苗間六尺位を可とす、此植付法には溝植と點植との二法あり、溝植は普通大規模の植

栽に用ひ點狀植は家屋の周圍又は田畑の畦畔等に於ける小規模の植栽に用ひらる。即ち溝植を行ふのは谷の方向に畦を作り巾二尺五寸深さ二尺の溝を掘り、此底部に刈干雜草を厚さ一尺位に布き能く踏均し、其上に掘り上げある土を三寸餘の厚さに被ひて均一に成し、之れに苗木の根を据へ其上に細土を五六寸の厚さに被ひ、苗木を少し引き上げる氣味に二、三回動搖せしめて根部の間に細土の能く密着する様注意し、其根上の土を能く踏み付け、又其上に細土を少し被ひ、且つ根際に雜草又は藁を布くべし、點狀植を行ふには一定の距離に於て圓形に徑三尺深さ二尺の穴を掘り、其中に前述の方法と同じ様に苗木を植付くべし。而して兩者とも植込の際燒土又は木灰を混和する時は肥料となるは勿論苗木の根付良好なり、點狀植苗木の根際に窪みある部分毎に細溝を附し雨水を停滯せざる様排水に注意すべし。(以下次號に譲る)

切 拔 帖

S N

一、世界最高齡之生物

メキシコの一小邑サンタマリア・デル・ツレの教會の庭に立つて居て世界最高齡の生物であるとの名聲を博して居るサイプレス樹は名木中でも最巨大な樹幹の所有者で其の直徑は五十呎である
二十八人の人々が手を十分左右に伸ばし

て御互に指先の接觸する様にして漸く其の周圍を取りかこむことが出来る。其の直徑はシカゴ大學のチャールズ・デュー・チエン・レン氏に從へばカールホルニア産のレッドウッド(セクワイア)の最大のものよりも尙十四呎太き。然し高さはセクワイアには及ばない
形態の類似して居る直徑五呎のサイプレス樹が徑一呎について二百の年輪を有して居る所から推測しチエン・レン氏は其のサイプレスの巨木の樹齡は五千歳以上であると評定して居る。エデプトのピラミッドの建設に取りか、つた頃には其の木は多分相當の大きさになつて居つたのであらうが今でも尙生長しつゝあるのである。

二、鋸屑と炭骸から

鋸屑と炭骸とを原料として押形器の力により一壓の下に優美な雅致のある形に作り出される糖菓園は此等廢物利用の新生面を開くものとして有望である。紙製品の場合の様に數次の相異なる作業により漸く出來上るのでなくつて之は原料を型の中につめて唯一撃を加へれば完成するのである。

出來上つたものは其の色澤組織が裸麥の麵麩に似て居て普通のボール紙よりは丈夫で又細工も爲易い。此の新製成物はペイントで塗ることも出來れば布を張りつけることも出來る又本當の金屬で鍍金することも出來る如何様に處理することも出來るが糖菓

函としてはペイントで裝飾されて居る。此の糖菓園を作るには細かに碎いた炭骸と鋸屑とを混ぜて其に結合劑として一定量の化學藥品(秘密)を加へるのである。鋸屑と炭骸との割合は製成品の要する性質に應じて一定でない。發明者は此の製品はボール紙よりも撓め易く金屬よりも粘り又水の漏らぬ様にも多孔質にも製することが出来ること主張して居る。

押形は熱せられた型で行はれ製品壓搾器から乾燥状態で出て來るから乾燥室を設ける必要がない。壓搾器熱は結合劑に作用し結合劑は鋸屑と結びついて固い稍多孔性の物質となる、炭骸の混入して居ることは製品が、ペイントで塗られない内は觸つて見ればわかるが目には見えない。炭骸は單に填充材料として原料の價格を低下し又出來上つた函にペイントを塗り或は膠で細工をするのに一層適する様に爲す爲に加入されるのであると信せられて居る。壓搾器の中に入れられる原料は如何なる形にもなり得る性質のもの故溝彫浮彫可なり複雑な意匠の模様を函を打出すことが出来る。

壓搾器から取り出された後粗雑な角などは鑪輪で磨きペイントを施される如何にして何時でも市場に出し得るのである
(右二項 Chinese より)

三、槭 樹

槭の木は北半球に生ずる樹木の中で最よ

く人に知られて居るもの、一である。械の木は日本支那には豊富で歐洲には普通で北亞米利加には廣く分布して居る、世界に明になつて居る械の種類は七十種で其中三十五種は日本支那の原産で北米には十三種を産する。

日本が械の先祖傳來の郷土であることは今や植物學者間に確實に認められて居る。此の東洋の島帝國に於ては械の原産種の面影を見ることが出来又世界中で一番人目を惹き一番美しく培養された數種類を見ることが出来、日本の森林は其の變化其の美しさ其の趣味を械に負ふことが非常に多い日本國民は械のあることを誇として居る、幾百年かの間日本人は顯著な比類のない特質を持つた變種を作り出す爲め手をつくして培養して來た、此の方面に對する彼等の努力の成功であつたことは今や日本の械の形姿がよく人目を惹き葉の〇彩が華美で構造が優雅である爲に世界中に鳴り渡つて居ることに徴しても證せらる。

日本人の械樹培養に於ける最も顯著な成功の一として數へられるのは矮小械樹(盆栽の如き)の産出である、其の短小なる樹木は植木鉢の中に生長して今日迄人力により遂行せられた植物養の最高度を示して居る、此等の矮樹は代々數百年間手入れを養せられて來たのである、其の葉は形狀〇彩構造等に於て各廣範圍の變化を示して居る。

一年中の或る期間に於て椰樹陳列會を開催することが日本人の間に流行して居る、種々の品種が出品せられ多くの人が參集して熱心に觀賞し優良種の出品人には賞與を授けて居る。

(右) 項 Populars より

愛さむが爲に

東北にて 仙華生

母校を去て荒れた社會に出てから一日一日と自分は荒みゆく。欲の爲に、望のたのみに。自然に母校愛着の心が薄らぐのは、當然の事にして、之制度の然らしむる所、境遇の然らしむる所、止むを得ぬ事であると思ふ。けれど、けれ共唯一つ風船の糸の様に母校と吾等を連結するものがある。日毎に褪せてゆく愛着の色を塗り更へ又塗り更へて濃やかに、努むるものがある。何であるか、何人も言ふであらう「そりや林友だよ」と、然り諸君の言ふた通りである。林友を見るや直ちに封紙に五指を突込み、其處には忠實もない、勤勉もない、筆は投げ、書類は閉じ、置いた算盤も此時丈はゴツサンである。(僕は元來自惚が強い)按摩は盲目であるとか何とかは盲目であるとか、一昨日讀んだ本にもあつたが正に此の動機は前者の變態に過ぎないと思ふ。如何に讀者殊に卒業生の此の林友を一日千秋の思ひで待ち侘び待ち焦れて居る事が推察

せられるであらう。而して距離の遠ざくに從ひ、一日が萬秋にもなるのであつて、紙上の林友代領收報告を見ても(皮肉だ、皮肉でない)略々領収事が出来るであらう。吾等は之れあるが爲に、安愛を感じ或は懷慕心を發するのである。同窓生の會合、奇遇の際に於て、突口の第一聲は正に此の林友の延長であるのだ、而して母校發展畫策の後援者は、幾多卒業生にして、此間弛みなき連絡は實に本紙の雙肩にあり、林友の使命は重大である。

僕は之が編纂の任に當る顧問先生始め各係員諸兄の努力を感謝し、御健勝を祈ると共に敢て一言を呈し、御參考に供し併せて會員諸兄の御批判を待つものである。

之は突發的に思ひつゝた事ではなく、近來常に痛感して居た事であつたのだが、一月號を觀て遂に執筆する事項が、林友發行即ち近時本紙に掲載する事項が、林友發行の主旨に反し、寧ろ悪化の傾向を示せるにあらざるやと言ふにあるのだ。近時社會原に言論の自由文壇の自由を絶叫せるに對し、監督廳又多少緩策に出でたりとは、昨今當局よりの夢信なるが、本紙をして一般雜誌局より一視するは甚だ遺憾とするものにして此點に就き投稿者並に、編纂員各位の御一考を煩はし度い。

或は言ふであらう「投稿少なき爲なり」と(それは困る)併し原稿少なき時は白紙とすも止むを得ない事にして、兩者何れを採

るべきや論する迄もない事の様に思ふ。

併し毎々號皆と言ふ譯ではないが、如斯理由、如斯方針により林友を、發行するならば、文藝欄丈でも、廢止するが至當であると思ふ。此際吳々も各位の御一考を望む次第である。

尙編輯の各位に附言して置き度い事は、林友發送簿の整理如何である。これは昨年十月號以來感じた事であるが、會員の死亡に對し、林友には謹んで哀悼の意を表し乍ら、未だに發送して居るのである。發送簿の點檢を希望す。

筆を洗ふに際し一言したきは、僕の書かうとした文彩と、書いた文彩と異な事である。即ち大家の美文辭書より流用し、以て編輯部員各位の努力を賞揚し、或は諸兄の投稿を感謝し置き、借て御一考を乞ふる心組なりしに、遺憾なり、鈍筆の然らしむる處となる、見よ、斯の如き短刀の文。

僕は再度投稿を躊躇したれど、此の汗顔此の赤面は、即ち母校を愛さむが爲め赤誠熱涙なりと、曲解し敢て諸賢の机下に馳せた次第。(一九二二、二二、一九)

別子通信

在別子なる篠原將英君より西澤敏論に寄せられたる書信中五良津事業區に於ける本年度豫定事業に關する點のみを乞ひ受けて次に掲ぐ事とせり

一、製炭事業

イ、製炭の目的

目的を分ちて二となす、一は當五良津山事業區にて製造したる黒木炭を、鑛業所調度課に供給し、傭員及一般労働者の需要に應ずるを目的とし、他の一は跡地にヒノキ苗を植栽造林するを目的とす。

ロ、伐採面積

面積は實測したるものにあらず。基本圖に依り、算定したるものなれば多少の誤差は免かれざるも、大體皆伐地約十町歩。擇伐地約六町歩なりとす。而して擇伐地は主に岩石露出せる部分にて、跡地の植栽に適せざる箇所をこれに充つ

ハ、伐採樹種及材積

伐採樹種としては主に、シデ、リヤウブモウカ、にして、サルタ(サルスベリ)カンコ、ナマエ、ブナ等を混合せるものにして其材積四千三百九十六石なり。材積も亦精密なる調査に依り算出したるものにはあらざるも、これは製品木炭四萬貫を基礎とし歩留り十三%と見做し、生木一石當り七拾貫のものとして計算したるものにして、蓋し數年の經驗上大差なきは勿論、却つて手数をかけて、毎木調査の如きを行ひたるものよりも好成績をあげ居るなり

- ニ、製炭及運搬其他の諸費用
- 1 炭竈築造費 拾竈築造するものとし一竈平均三十圓
- 2 製炭夫賃 製品拾貫尙當り四十五錢

3 山増金

製炭賃を調節するため設けられるものにして最高拾貫尙當り拾錢平均五錢を給す

4 人肩山出賃

山出距離最長二十八町、最短十二町(但しこの中には人肩山出困難なるため輕便鐵道三〇〇間を使用せるものあり)にして、其平均拾貫尙當り單價二十錢強

5 軌道運搬費

軌條延長一八一四、三間にて、十貫尙當り壹錢八厘(トロリー一臺七貫五百尙當り十四錢)

6 索道運賃

索道は回轉式にして延長六三六間、九十貫尙當り二錢八厘

7 牛馬車運賃

距離約四里、十貫尙當り單價二十六錢七厘(一臺の積載量二十八俵)

8 木代金

製品十貫尙に付七錢七厘

9 軌道索道償却費其他間接費合計

製品十貫尙當り二十六錢六厘

10 雜役賃雜品費特價物品價值合計

製品十貫尙當り五十四錢九厘

11 經費合計

製品十貫當り、二圓三拾九錢

12 供給單價

製品十貫當り貳圓拾壹錢 右供給單價より經費合計を引き去るたる殘七錢壹厘は製品拾貫尙に對する利益金とす、但し愚生等傭員の俸給等を割當計算する時は却つて損失となるべし、然れ共植栽後將來の收入を豫想しつゝ、損を敢てなし居るもの、如し。

從來當所に行ひ來りし製炭法は昔よりの習慣をそのまゝ、適用し何等改良を加へられたる点無之、收炭量の如何等の点には餘りに意を用ひられざりし傾向有之候へば、今年是有名なる製炭法を参考とし、少々試験製炭を行ひ大いに改善を加ふべく、唯今思考中に有之候。

二、苗圃事業

1 全掘取本數 ヒノキ苗、八七〇〇〇本
右の内にて
在來苗

山出苗 ヒノキ四年生三七八〇〇本
床替苗 同 山出苗殘 七七〇〇〇本
同 上 同 三年生 四一五〇〇本
他より譲受けしもの

床替苗 ヒノキ二年生七〇〇〇〇本
2 播種は一切行はず
三、植栽事業

1 新植
面積九町二段歩 (前年度製炭皆伐地)
植栽本數 一町歩四千本植 三六八〇〇本

8 補植
面積 十町五段歩 (前年度新植地に
て主に製炭窠跡其他に補植す)
植栽本數 壹千本 以上

安筑蘇門會便り

去る大正九年七月安筑在任の蘇門出身者

と叫號して安筑蘇門會を開催の計劃で準備をしたが遂種々の突發事項頻出して會台の機運に到らなかつたが越えて同年十一月初旬信濃山林會第二十回總會が豊科町で開催された時に計らずも約三十名餘り集まつたので急に臨時蘇門會を同町遊龜通料亭に開いたが單に臨時の會合に過ぎなかつた、其後安筑への在住者も増加したを幸ひ愈々機も熟して去る一月二十八日淺間温泉常盤湯で安筑蘇門會と名を打つて會合した同日午後四時より約二時間會則其他二三件協議を遂げ午後六時より茲に愈々發會式を擧げた譯である

加藤純一君の發會の挨拶があり在校時代の懷舊談や茶目の思ひ出に耽り大に蘇門の大氣焔を擧げ例のナカノリサンは合計三十名許りの圓陣を作り宮川先生のヨイヨイヨイの音頭振りは大に御手に入つたもの會場の廣間も所狭しと踊つて大に木曾氣分を味はつた
御蔭様で同夜同湯で開催された米國歸りの何某君歡迎會員總立らのナカノリサン見物は聊か御氣の毒でならなかつた餘興黒岩君のクラジートンに扮したり白人踊りは大に凝つたもの拍手喝采を止ませなかつた
因に當市在住の宮川先生は御多忙中にもか、わらず御臨席下されし事を深く感謝し新家先生や西澤教頭及日義校長林先生の御臨席を得られなかつたのは甚だ遺憾だつた
次回には今回欠席の會員諸君共には是非御出

席下さらん事を切望致し候
當日出席會員諸氏は
宮川 先生 松本商業學校 顧問
高橋 作次 大町小林區署 (一) 幹事
加藤 純一 安曇村 (二) 幹事
黒岩 正平 烏川村 (二) 幹事
和田 宗吉 松本小林區署 (四) 幹事
中島 庸三 鹽尻村 (六)
丸山金三郎 松本小林區署 (八)
安藤 二郎 東筑摩郡役所 (九)
松島芳太郎 麻績村役場 (九)
中垣 英一 松本造林署 (十一)
稻葉 増吉 東筑摩郡役所 (十二)
岡 西 猛 松本小林區署 (十三)
樋口 颯 松本造林署 (十三)
久保田邦次 坂北村役場 (十三)
藤澤甲子十 新村 (十六)
青木 重俊 大町小林區署 (十六)
長崎 信一 梓村 (十七)
勝野 忠三 麻績村役場 (十七)
安筑蘇門會々則
第一條 本會は安筑蘇門會と稱す
但し事務所は臨時松本小林區署内に置く
第二條 本會は會員相互の親睦を計り母校との連絡を保ち以て林業智識の向上開發を期するを目的とす
第三條 本會は安筑在任の蘇門出身者をして組織す
第四條 本會員たるものは會費として年額

金壹圓を本會に贖出するものとす
第五條 本會の例會は毎年春秋二期とし會期は其都度通知するものとす

第六條 本會に左の顧問及び役員を置く
但し顧問及び役員は無報酬とす
一、顧問 若干名
二、幹事 四名

第七條 役員任期は滿二ケ年とす
但し滿期後と雖も後任者なき場合は之を繼續し其任に當るものとす

第八條 役員選挙は會員過半数以上の出席者の互選に依るものとす
第九條 顧問は母校の職員並に安筑在任の母校職員たりしものより之を推舉す
第十條 幹事は會務の一切を處理す

コーラス MY生

○何となう嬉しき山の寢覺かも小鳥の群の今朝のコーラス。
○戀といふ秘密の胸に瞬間を蜘蛛の巢のやうな視線のからむ。
○獨して物のなし得ぬ男あり黨派づくつて人に言はする。
○雪降れば景色好もしいや嬉しいや悲しけれ明日を思ひて。
○武者振宴に眼うるましてきさらぎの空みぞれ降る夜。
○鳥がなく晨の空に響うるみりのわたりは梅のさくらし。

○汗をまさり寒くしあれば炭たきて湯氣の立つ輪をながめ入る。
○しめやかに木曾路隈なくあかどきは霞のペールかけし山山。
○霽昂る晨の空にくだかけのきはひ込めたる聲のそちこち。
○春雨の玉ぬきどめる金雀枝をえやし太陽未だ上らず。

清い心の持主

横の倉

私は、
此頃いつにない、
よい收穫がありました。

彩点に、
疲れた頭腦を休めんと、
夕刻、
川邊の風呂へ参りました。
所が先に、
二人三人、
浸つた顔に、
上氣させ、
浮世風呂にも、
あり相な、
様子で喋舌つて居りました。
ガラガラトんど、
入つて來ました其人は、
飄々跟々蹣跚、

此邊こゝらに、
見なれぬお爺さん、
皆が上つて、
流して居ると、
爺さん、
如何した、
バチャ〜、
ブク〜ブク〜、
浮いて沈んで、
沈んで浮いて、

流し終つた、
若者一人、
驚き抱へてやりました。
見ると、
眼も塞いで居る。
おや變だ、
二人三人、
抱へて上げて、
水よ冷せよ大騒ぎ、
若者一人が、
おは働き、
外の人々、
見てご座る、
呆氣にとられて立つたまゝ。
やうやううーんど、
息吹き返し、
湯宿のおかみが、
伴れ出した。

友 林 蘇 岐

【10】

若者やがて、
上つたいらしい。
其若者の懐に、
林家必携、
小さい冊子が、
覗いて居りました。
私はたつた二十分、
風呂に入つて、
よい收獲をしました。
それは、
軽く淡くて、
憂世より、
抜け出た様な、
風呂心地、
ではなく、
溪川の、
数奇な私語、
それでもない。
あの若者の、
清い心の持主でした。

君と別れん」は記事幅帳に付き次號

記念事業 醜 領收報 告

鈴木 繁君

金貳拾圓
金五圓
金五圓
金五圓
金五圓
金八圓
金拾圓
金五圓
金五圓
金五圓
金參圓
金五圓
金五圓
金八圓
金貳圓
金貳圓
金五圓
金拾圓
金貳圓五拾錢
金五圓

原田 義治君
安井 嘉一君
野澤 博君
山中三十四君
岡西 萬秋君
唐澤 繁夫君
鷹見 勳君
長崎千萬一君
原 英雄君
村上 道信君
勝野 忠三君
下平 通雄君
宮下 武夫君
青木 重俊君
長谷川房造君
澤田貞次郎君
和田常次郎君
井上 寛一君
矢野 佑君
藤枝 茂君
樋口久次郎君
榎山 節男君
中島 信敏君
吉村 幸助君
柳澤 得衛君
紺田 孝三君

金五圓
金五圓
金六圓
金五圓
金五圓
金參拾圓
金五圓
金五圓
金拾圓
金拾圓
金五圓(完)
金拾圓
金五圓
金五圓
金七圓
金八圓
金八圓
金拾圓

故福田友治郎君ノ吊慰金
領收報 告

岡田彌兵衛君

水口 久君
花村 隼則君
田中 泰吉君
宮川 丑作君
今井 碧海君
遠藤 宗作君
村松 一清君
早川 嘉一君
大森 久治君
米山 修君
河島 憲一君
中島 要人君
新井喜多雄君
野村 光智君
大島 晁治君
平田 實君
小池 新伍君
塩澤 英一君

合計金貳百九拾五圓也
累計金貳千百九拾九圓也

大正十一年三月廿三日印刷
大正十一年三月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福島町四番地
編輯兼發行人 安井正夫
長野縣松本市小柳町十五番地
印刷所 淺川活版所
發行所 蘆澤書店

長野縣松本市小柳町十五番地
印刷所 淺川活版所
長野縣西筑摩郡福島町六番地
發行所 蘆澤書店

【定價金參錢】